

理想を求め 民衆と ともに信念を貫く

おざきゆきお がくどう
尾崎行雄 (号堂)

尾崎行雄(号堂)は衆議院名誉議員で「憲政の神様」「議会政治の父」とよばれています。神奈川県で生まれ、1872(明治5)年に三重県伊勢市に引っ越し、宮崎文庫英学校に入学しました。

1882(明治15)年大隈重信の立憲改進黨の創立に参加し、1890(明治23)年第1回総選挙で三重県選挙区より出馬し当選。以後63年間に25回連続当選し、司法大臣や文部大臣の役職を務めました。また、桂太郎首相を糾弾する演説を行って第一次護憲運動の中心となりました。

第一次世界大戦後のヨーロッパで戦争の悲惨さを見聞して以後は、一貫した軍縮論者となり、大正デモクラシーの進展とともに普通選挙運動を支持しました。

戦後の国会でも活躍して、民主主義の復活と世界平和の確立のために力を尽くしました。31歳から94歳まで、衆議院議員として活躍し、政界を引退しました。

伊勢市に尾崎号堂記念館があります。また、国会前庭の敷地内にある憲政記念館は、尾崎の功績を称えて建設されたものであり、銅像も建てられています。



尾崎号堂記念館 (伊勢志摩きらり干選提供)

※号堂は、本名ではなく、雅号です。

(雅号とは、文筆家、画家、学者などが本名以外につける風雅な名のことです。)

学習のめあて

尾崎行雄は、「憲政の神様」と呼ばれた政治家です。憲政とは、憲法にもとづく政治のことです。1912(大正元)年に当時の桂太郎内閣が国会を無視する態度をとったとして、憲法にもとづく政治を守ろうとする運動が起こりますが、この時、尾崎は国会で桂首相の責任を問い詰める演説を行っています(このあと桂内閣は退陣におこまれました)。また、国際平和を目指した政治家としても知られています。軍縮(軍備縮小)を求め、軍備拡張を求める軍部と対立して激しい妨害行為を受けますが、国民の意向を政治に反映させようと、普通選挙の実現にも力を入れて取り組みました。昭和になってからも、軍部を批判する演説をしましたが、このときは、懐に辞世の句をもっていたと言われています。このような尾崎を25回連続して国会に送ったのは、三重の選挙区民でした。時には自費で選挙運動を行い、また、戦時中、大政翼賛会に反発して孤立した尾崎に対しても、変わらず支持を続けました。

当時の三重県の選挙区民の人々は、どのような気持ちで尾崎を支えたのでしょうか。理想を求め民衆とともに信念を貫き、日本の民主政治の確立に大きな足跡を残した尾崎の生涯について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 尾崎行雄が議員を務めた63年間に、国内外ではどのような出来事が起きたのでしょうか。
 - 2 尾崎行雄が、軍縮論者になったのはなぜでしょうか。
 - 3 尾崎行雄は、どのような考えをもって、普通選挙を実現させようとしたのでしょうか。
 - 4 三重の選挙区民は、どのような気持ちで尾崎行雄を支え、連続25回の当選に導いたのでしょうか。
 - 5 理想を求め民衆とともに信念を貫いた尾崎行雄の生き方について考え、話し合みましょう。
 - 6 真実や理想を求めて努力し、自分たちの住む地域に尽くそうとした人物について調べ、まとめてみましょう。
- ☆ 第1部の「自分の人生は自分の手で切り拓こう(P30~33)」を活用し、理想の実現を目指して前向きに生きることについて考えてみましょう。

普通選挙の先頭に

1918 (大正7) 年に終結した第一次世界大戦後の世界は、思想的な大転換期でした。民主政治の必要性や民主思想がますます強くなる反面、階級闘争 (支配階級と被支配階級の闘争) が叫ばれ、資本家と労働者の対立も険しくなってきました。

戦後の世界はどうなるだろうか。日本はどのような立場にあるべきなのか。尾崎行雄は、大戦後の欧米旅行に出発しました。まず、アメリカに行き、その後イギリスに渡りました。実際に行き、欧米の思想の変化を直に感じました。最も衝撃を受けたのはフランスやベルギーで見た大戦の傷跡でした。戦争による破壊はすさまじいものでした。残骸はまるで鉄や銅でできた大きな鉱山のように、天変地異が起こってもこれだけの破壊はできないと感じたほどでした。「戦争は国家のためといいながら、結局、その国家や人類を滅ぼすものとなっている。このような大破壊を行う人類というのは、なんと愚かなものなのか」と思わずにはいらませんでした。尾崎は「帰国したら、軍備制限と国際平和のために力をつくそう」と決心したのでした。

欧州視察後の尾崎の政治目標は、この軍縮 (軍備縮小) と普選 (普通選挙) でした。

1919 (大正8) 年12月、日本に着いてみると、国内では物価が高騰して生活を圧迫し、労使の対立が激しさを増していました。不満を持った労働者の中には、議会政治を否定して、暴力的な直接行動に訴える者もいました。この状況を打開するには、議会が民意を反映する場となるた

めに、「普通選挙を実現するより他はない」と考えるようになりました。尾崎はこう決心すると、普選運動の先頭に立ちました。東京の両国での普通選挙促進大会では5万人もの大衆が集まり、芝浦や上野公園、日比谷公園では全国大会も開かれました。また、尾崎は、京都や神戸など全国各地に遊説にでかけ、普選運動を盛り上げるために、奔走しました。

1922 (大正11) 年、尾崎は、独自の立場から普選論を議会で演説したものの、普選法案は否決されました。しかし、1925 (大正14) 年の加藤高明内閣のとき、満25歳の男子に衆議院議員の選挙権を与える普通選挙法が、ついに成立したのでした。長い道のりの末に、やっと尾崎たちの運動が実ったのでした。

尾崎自身の選挙の様子は、世界でも例を見ないものでした。それは、尾崎の政治姿勢に



護憲運動の頃の尾崎行雄

尊敬の気持ちをもつ人々の姿でした。尾崎の清廉潔白 (心が清らかで欲がない) で理想を貫く強い意志を、伊勢を中心とした三重の選挙区民が感じ取り、彼を支援し続けたのです。支持者は手弁当 (自費) で選挙にかかる費用を負担しあって、選挙運動を行いました。そして、当選した尾崎に金や利権を求めず、尾崎の理想や主張をよく理解し、彼を支持し続けた選挙民の心ばえもまた素晴らしいものでした。

軍国主義との闘い

もう一つの課題である軍縮にはどう取り組んだのでしょうか。その頃、日本では海軍と陸軍の費用をあわせて7億5千万円もかかっていた。これは政府の予算の半分にあたりました。イギリスやアメリカは第一次世界大戦の反動で、軍縮の機運が高まっていました。「この機に、日本が率先して軍備制限を唱えれば、イギリスやアメリカも必ず日本の考えについてくるに違いない」と、尾崎は考えました。

1923 (大正12) 年、尾崎は、軍備制限決議案を議会に提出しました。2時間にもおよぶ説明は、尾崎の議員生活の中で「最も力を込めたものの一つである」というほどの演説でした。しかし、この議案は大差で否決されました。尾崎はその結果に失望したものの、そんなことではへこたれず、議会でだめなら、直接世論に訴えようと考え、全国遊説に出ました。演説会では入場者にハガキを渡し、軍縮への賛否のアンケートをとったところ、賛成は9割を超えていました。

尾崎は、尾崎の政治主張に反対を唱える人たちによって、嫌がらせや妨害行為を受けることがしばしばありました。ある演説会場では、尾崎の暗殺を企てる刺客が入り込み、危うく難を逃れました。また、あるときは、宿泊先にも暴漢が押し入り、尾崎の命をもらうと、脅されることもありました。しかし、尾崎はこんなことではひるみませんでした。

1923 (大正12) 年の秋、アメリカは世界に呼びかけて海軍軍縮会議を提案してきました。日本もアメリカの呼びかけを無視できず、ついに海軍軍縮条約に調印しました。世界は、尾崎が提案したように、軍縮へ大きく動いたのでした。

「憲政の父尾崎行雄の生涯」(NPO法人 峯堂香風) から作成

